

INTERNATIONAL ERIC NEWSLETTER

No.11

APRIL 1992

エリック ニュースレター

国際理解教育・資料情報センター International Education Resource & Information Center

特集：新しい自分に出会えた！ ERIC オーストラリア研修報告

移民・難民・原住民など様々な異文化をかかえ、広大な国土に熱帯から亜寒帯までの自然環境に恵まれたオーストラリア。人権教育、環境教育、平和教育、異文化理解教育などの「先進国」でもあります。ERICは、海外の学校や教育団体を訪ねる研修プログラムを過去3回オーストラリアで実施してきました。参加者の感想文や直接聞いた話から旅の報告をお届けします。

スケジュール

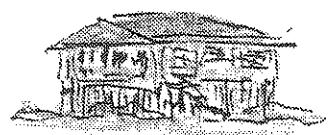
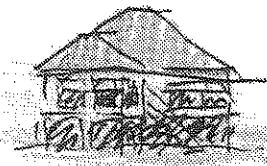
1991年8/20（火）現地集合。オーストラリアは早春で意外と暖かい。シドニー泊。

8/21（水）朝、AN016便でシドニーからブリスベン。
QDEC（クイーンズランド開発教育センター）よりバスで出迎えに。ホテルに荷をおろし、市内バスで州立植物公園へ。カフェテラスで昼食と全行程の説明あり。公園から徒歩で州教育省訪問。アジア学習などの話を華麗かつ繊細な3人の女性担当官より聞く。夜、QDECに集う人たちと会食。ブリスベン泊。

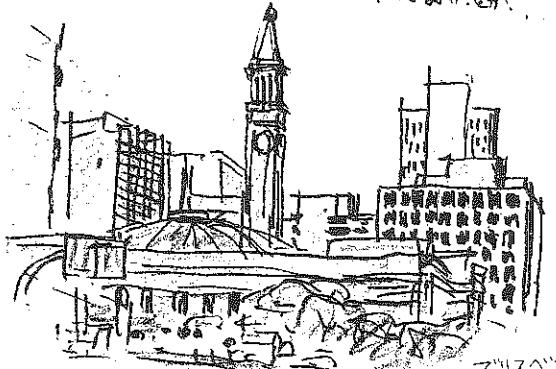
8/22（木）午前、QDEC会員、陽気なブライアン先生の運転するマイクロバスでディセプション・ベイ小学校（公立）訪問。マングローブの森で生徒より自然保護活動の説明を受ける。昼食、海辺の公園でフィッシュ＆チップス。午後、市内のカトリック教育センター訪問。お話を他、歌やゲームの紹介も。夕日が美しい。レバノン料理初体験。夜、各自、観劇など。アムネスティ主催「ロックンロールサーカス」あり。ブリスベン泊。



シドニー → ブリスベン
10:15便、Boeing 767
雲の中の空が自然豊かでいい
かわいい感じ



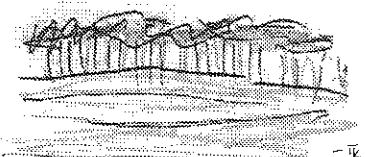
クィーバン式の家屋
高木式（高木式）



ブリスベン
タウンホール



マングローブの森の
説明をしてくわいた
リンちゃん



Deception Bay North State School

ハイ？
8月4日



8/23 (金) 午前、電車でイプスウィッヂ市のセント。
→ P5.6.7

メアリイ女学院（私立）訪問。昼食は校内売店のホット

ドックとジュース、生徒たちと。3時頃まで授業参観。
→ P11~12

夕方、廃屋を改造したブリスベン市民活動センターを訪

れ、QDEC、コミュニティー・エイド・アブロードなど
の市民団体の話を聞く。ブリスベン泊。

8/24 (土) ホームステイ開始。2~3人単位で、
→ P11

QDEC会員にお世話になる。梅村・西脇・望月3氏は、

午前中クイーンズランド州地理教師の会の分科会「アジ

アの視点からアジア学習を語る」で報告、参加者から質

問せめに。海岸でのんびりしたり、コアラを見たり。

8/25 (日) ホストファミリーと大集合。羊毛刈り見て

カンガルーと遊んだ後、ラミントン国立公園へ。温帶混

合林散策、ピクニック、英國風ティータイムなど楽しむ。

一路、空港へ。AN155便でシドニーへ。シドニー泊。

8/26 (月) 午前、Ideasセンター、デイヴさんの運転

で、チャッツウッド中等学校（公立）とキラニー・ハイ

ツ小学校（公立）訪問。生徒のプラスバンド演奏や模擬

国会審議を見学。午後、グリンピース訪問。港近くの倉

庫を改装したスタジオが並ぶ一角にある。船とカモメを

眺めながら芝生の上でお話。夜、自由行動、書籍など購

入。シドニー泊。

8/27 (火) 朝食兼ミーティングをサー・キュラー・キー

で。午前、ニュー・サウス・ウェールズ州水質庁の自然

観察プログラム見学、ガイミーヤ中学校生徒と共に、国

立公園に行き水質検査など。昼食は川辺で皆と。市内に

戻り、夕方、オストケア（難民援助団体）訪問。夜、フ

ェリーで対岸のマンリーに渡りグループごとに夕食。楽

しくノンビリ。シドニー泊。

8/28 (水) 午前、オーストラリア独立国際中等学校（私

立）訪問。生徒自身によるエイズを題材にした劇、見学。

午後、自由行動。夕方、Ideasセンター訪問。開発教育

→ P11.12

ネットワークの話し合いを見学。センターの本棚には書

籍が並び、パソコンにもデータが入っている。中・高校

生が自由に来訪、調べものをしていた。夜、Ideasセン

ターのデイヴ（シドニーでのスケジュール編成から、連

日マイクロバスを運転し各所を案内して下さった）を囲

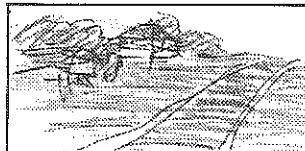
んでギリシャ料理で会食。シドニー泊。

8/29 (木) 朝、シドニー発。帰国。

注 QDECは昨年9月より「GLOBAL LEARNING CENTRE」

名称変更されました。





オーストラリア教育活動から

立場を越えて連携プレーを

一番印象に残っているのは、連邦及び州政府・学校・民間団体・地域社会の関係や、その中の人と人との関係が、管理よりも信頼をもとに結びついていたこと。出会った先生と生徒の会話や民間団体スタッフの言動から、相互の信頼関係の上にある柔軟な対応を肌で感じました。

アジア学習プログラム

アジア学習は、連邦政府が率先して提唱し、州政府が実践に向けて取り組む3年計画のプログラムである。

○足元を見つめて市民育成

クィーンズランド州教育省を訪ねてまず驚いたのは、現われた責任者が美しい女性であったこと。教育省というと「背広姿のお役人」に無彩色といったイメージがあまりにも強かった。同行の男性群は、目をしばたたいて唖然といった様子。

これまでも、中国語・インドネシア語・日本語・韓国語を外国语教育に取り入れるなどの試みはあり、ヨーロッパ一辺倒から脱皮しようとする姿勢は見られた。しかし、今回のプログラムは、自国の足元であるアジアを見直し、自分の位置を知った市民を育成しようというねらいが根本にある点で、いっそう興味深い。プログラムは、連邦政府と州政府の双方からの資金で、小～高の全教科・科目が対象。例えば、数学では、統計の授業にアジアの人口や森林を題材とする資料を利用することで、無味乾燥な数字で考える学習から、数字の意味を考える学習へと発展させることができる。

このプログラムは単にアジアに関する知識の注入にとどまっていない。人権、平和、環境など幅広いテーマを、身近な問題と結びつけて「アジア学習」として扱っている。とりわけ環境教育は、森林伐採などの環境破壊が身近に起こっている折から、自分たちの地域環境をいかに守っていくかに関する住民の意識が高く、そうした運動が学習に結びついて取り組まれやすいようである。

○実践をすすめるサポートシステム

プログラムの担当者は、熱心な現場の教師と協力しな

がら、推進・普及にあたっている。説明に応じてくれた担当者は、なんと3人とも女性、30歳前半であろうか…省内の生き生きとした雰囲気が新鮮だった。3人の主な役割は、学校の教師にアジア学習プログラムの意義を理解してもらう。幼児教育を対象に教師の相談に応じる。環境教育に焦点をあて現場の教師の相談に応じる、などでコンサルタントとして情報提供や調査などの活動を行っている。3人とも実際に教壇に立っていた経験があり、対応が丁寧で現場の教師に親近感をもたれやすい。政府、学校、教師の連携をスムーズにしている重要な鍵の一つではないだろうか。

また、具体的に実践していく上で、教材や資料の不足が阻害要因の1つだとわかり、現場の教師を巻き込んだ教材開発なども行われている。教材やカリキュラムに関する政府の方針は極めて柔軟で、教材の選択が各学校に任せられている。一方で系統性に欠けるという批判が聞かれるものの、個々の教師の独創性や意欲を引き出すには非常に役立っている。

アジア学習プログラムの評価、成果については、3年計画の途中でまだ公式に検討されていないとのことであった。しかし、現場の教師が実践しようとするとき、教育省へ行けば相談にのってくれる担当者がいて資料を提供してくれ、現場に持ち帰って実践できるというシステムがある。そのおかげで、教師の教材研究に任せきりにした場合と比べて、新しいカリキュラム開発への意欲を掻き立てるという効果が上がっているのは確かなようだ。

環境教育

ブリスベン近郊の公立ディセプション・ベイ小学校では、6年生の1クラスが学校周辺にある荒れた土地で植林活動に取り組んでいた。

○子どもたちの提案が市議会にとりあげられた

「学校近くで荒れ果てたまま放置されている土地がある」という担任の先生の言葉に刺激され、子どもたちは市議会に手紙を書いた。「自分たちの手で植林を行い、もとのような森にして野生動物が戻ってくるようにしたい」という子どもたちの提案は、市議会で検討され、1つのプロジェクトとして同クラスに委託されると同時に、この土地の周囲には柵が立てられた。最初は社会科の授業の一環として、現在は週毎の当番が毎日水やりに



通うというかたちで、土地の保護と再生を行なっている。このクラスの卒業後は、学校が責任をもってプロジェクトを継続するという。

○フィールドワーク

定期的に現場に出向き、地質や周囲を流れる小さな川の水質を検査する。酸素や窒素濃度を調べて、土壤に適した種類の木を植えたり、土壤の再生度を観察記録したりするのだ。以前何が生えていたかを推測しながら、乾燥したところにはユーカリを、川岸の湿ったところにはマングローブなどを植えていく。また、試薬を使用する時にできる細かいプラスチックのごみにも注意を払って、決して落とさないようにしているのに感心！毎回できる試水も貯めておいて汚水処理場に持っていくなど、環境的配慮は徹底している。単に「植林活動」に携わるというだけでなく、「環境保護・保全のための植林」という大前提を理解した上での体験学習なのであろう。

○一人ひとりをたいせつに

子どもたちは、自分たちの土地という愛着を抱いていて、授業以外にもしばしば遊びがてら見に行ったり、水まきに通ったりしているそうだ。こうした主体性が育つ陰には、先生たちの日頃の子どもたちへの接し方がある。「子どもたちを必ずほめてやってください。自信をもって、もっといろんなことをやろうとしますから…」と、わずか1時間の訪問者に過ぎない私たちにまで言われ、「この子は今日のために写真を撮るのを引き受けました」「あの子はお昼のパンを用意してくれました」と紹介された。一人ひとりが活躍できる場として役割分担し、それぞれが異なるレベルでやっていることをよく見て評価するというこの先生の姿勢が印象に残っている。

○地域の住民として

このプロジェクトは、学校や子どもたちと地域社会との関わり方という点においても非常に興味深い。子どもたちが学習の場として地域を利用させてもらうだけでなく、地域の役に立つ行動を返していく、というギブ＆テイクの関係ができている。地域環境の実態を、政府ではなく、子どもたちが自分たちの実習記録を通して住民に報告する。それによって、地域全体に環境との共生意識が高まるという流れや広がりが生まれる。ここでは、近くの大学が文化祭の一環として市民対象に行った「環境問題実践レポートコンクール」がきっかけとなった。応

募した子どもたちのレポートが、2位に選ばれ、州政府の広報紙に紹介されたのだ。

こうした地域社会への関わり方が、父母をはじめとする学校外部の人々の学校に対する理解や協力を得やすくしている。その結果、教育活動における担任や学校の負担が小さくなり、教育内容も柔軟になるようだ。

○子どもだって市民だよ！

小学校、大学、地域社会、州政府が互いの枠組を越えた柔軟な連携プレー。州政府の柔軟な姿勢が地域住民の信頼を生み、住民からの働きかけを促す。それぞれの構成員が年齢や所属に関係なく、子どもたちも、「一市民として何ができるか？」を共通課題として生きている。このことは、ある私立高校の校長先生の言葉「子どもには、大人と協力していくことで一人の人間として生きていく方法を身につけてもらう」とも共鳴して、大きな意味を残している。

民間団体の教育活動

シドニーで、民間環境保護団体のグリーンピースを訪問し、民間団体が国際理解教育にどのように関わっているかについて話をきいた。

○先生はひとりっきりじゃない

グリーンピースには、現在、教育担当の職員が1人いて、学校訪問などをしながらアドバイザー兼インストラクターとして活躍している。例えば、小学4年生のクラスに呼ばれて、食物連鎖のロールプレーを指導する。子どもたちは、プランクトンからはじまって人間に至るまで、様々な生物を役割分担で演ずる。それによって、どんなに小さなプランクトンであっても、人間の生命と関わりのあることを身をもって感じ、自然の重要性を体験を通して理解できる。

また、教師による教科別研究会に頼まれて情報提供に出かけることもある。こうした場は、民間団体主催の研修会に教師の参加を促す広報のチャンスでもある。

昨年、複数の民間団体が協力して教師対象のセミナーを行ったそうだ。平日の放課後に開催し、約80名の参加があったという。「人が集まらないのは内容に問題があるから。魅力的なセミナーをやれば参加者は増えるはず」という担当者の意気込みに、ただただ頷くのみ。



○教師が民間団体へ転職

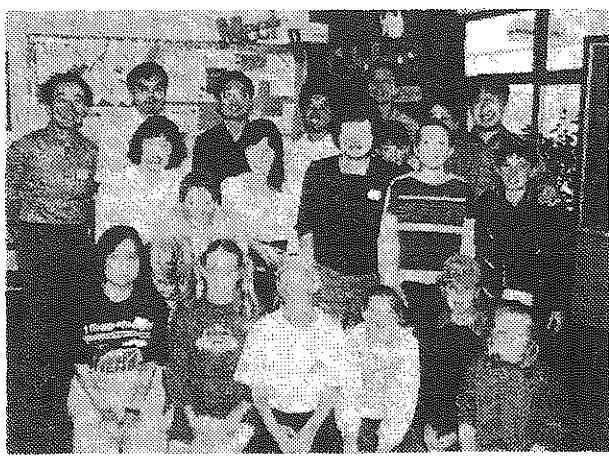
民間団体が、自らの活動や現状・出来事の紹介だけでなく、こうしたことこどもたちにわかりやすく伝えるにはどうしたらよいか、という手法までを指導できているのは、うらやましいかぎりだ。民間団体のスタッフに元教師が少なくない所以でもあろう。教師の親近感や信頼が得やすくなり、民間団体と学校・教師の連携をスムーズにしている。「確かに、学校教師と民間団体の歩みよりには容易でない面もあるが」と前置きした上で、「近年、教師から民間団体スタッフに転職する者が増えている。彼らが学校や教師と民間団体との間において触媒的機能を発揮することにより、相互からの働きかけが以前より活発になってきた」と説明してくれた。

○垣根を越えた連携プレーを

前の3つの事例を見聞してしみじみ思う。州政府、学校、教師、民間団体など異なるセクターの担当者が、「各自の立場を越えて総合的に動かないと現状を変えていく原動力は生まれない、また、同じ立場の人と情報交換しているだけでは全体像が掴めない」と、連携することの意味を非常によく理解しているということだ。こうした認識や心構えが共通見解となって、互いの働きかけに弾みをついているのである。

民間団体に携わる者として、日本でも、民間団体間の関係が単なる情報交換や個人的な結びつきに終始せず、協同で一つのプロジェクトを手がけ、政府・学校・地域社会に働きかけるような動きをつくりだせたらと考えている。

金光律子さん（専門学校教員）'91参加



ディセプション・ペイ小学校。マングローブの森で自分たちの活動を紹介してくれた6年生と、教室での一枚。

開かれた学校教育

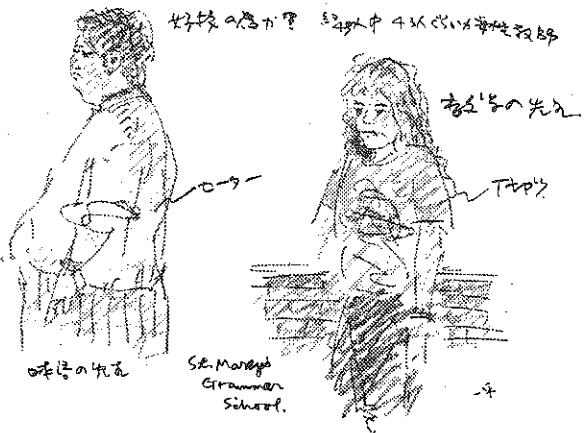
印象深かったことの一つに、学校教育が閉鎖的でないことがある。2つの事例を振り返ってみると…

私立セント・メリィ女学院では、8年生が、美術の時間に先生に引率されて近所の美術館を訪れ、館員の説明を受けていた。豊かな家庭の子女だけを集めた学校ではないだけに、指導は決して容易でない。が、ごく自然に生徒を連れ出しているのが実に印象的だった。日本における生徒指導上の難しい現実とは対照的。

シドニー郊外の中等学校では、地理の授業で11年生が、国立公園内で水質調査の実習をしていた。この授業は、州の水質庁から希望する学校に寄贈された水質調査器具を用いて、同庁の教育部門担当者による指導で展開されていた。実習で得られた調査結果は同庁に報告されることになっているので、生徒の実習成果が即、地域社会への貢献となる。さらに、文部行政以外の行政当局と学校が結びついているだけに、学校の役割を狭い閉鎖的な「教育」という枠に押込めないで、社会の一員として学校を位置付けている。ディセプション・ペイ小学校（3ページ参照）の例もある。

確かに、オーストラリアと日本の教育事情では異なる点が多い。オーストラリアでは、教育省によるガイドラインはあるものの、教材の取捨選択をはじめ実際の授業で、教師の裁量が大幅に認められている。一方、日本では、入学試験に縛られた知識の詰込みになりがちである。しかし、学校教育と社会との関わりを再考する上で、有益な旅であった。

西脇保幸さん（大学教員）'91参加





真のゆとり教育 道徳教育

私立セント・メリイ女学院を訪問したときのこと、中学2年のあるクラスでは「パーソナル・ディベロップメント（人格形成）」の授業が始まっていた。日本でいうなら、道徳か宗教の時間とでもいうのだろうか、クラスの全員が必修の授業である。この日は、自己、あるいは自己と他者の関係における「アサーティブ」（自分の立場や考えを感情的にならぬ、また相手も感情的にさせないできちんと伝える）、「パッシブ」（自信をもてないでいる）、「アグレッシブ」（自分の主張を感情的、攻撃的に通そうとする）な態度についてロールプレイを使って進められていた。

○ロールプレイを使って

場面設定と課題について先生が説明する。「バスケットボールの練習中に『君は下手だからチームから外れてほしい』と言われた。どうしたらよいか？」早速、2人で実演。生徒の1人が選ばれて、先生を相手に演技する。照れたり恥ずかしがったりもせず、真剣に役になりきっている生徒の様子に驚いた。見ている生徒からは、野次も陰険な笑いも聞こえない。この後、2人ずつの生徒を何組か選んで演技してもらうことを繰り返す。実演を通して、演技する生徒は、相手の立場や状況を考えながら、まずは「言われた自分」をふりかえり、認める。その上で、自分の立場、状況、理由などを主張する訓練だ。一方、見ている生徒は、第三者の立場で状況を観察しながら、どのような対処の仕方が一番よいのかを考えていく。教師が生徒一人ひとりの参加を把握していて、どの生徒にも平等に実演のチャンスがまわっているようだ。

○いろいろな考え方があるんだね…

教師が予め決められた解答に生徒を導いていくのではなく、教師も生徒と一緒に、よりよい答えを求めてみんなで創造していく授業展開に強い衝撃をうけた。教師側の価値観を教えこむのではなく、教師が生徒の位置までおりていくことから出発する。授業の評価基準の一つは、

多様な考え方に出合った時に、「そういう考え方もあるんだな」と思えることにありそうだ。

クラスの人数が少ないとや、カリキュラムが日本より余裕をもって組まれているというやりやすさもあるのだろうが、教師と生徒が友だちどうしのような関係であればいいながら、一人ひとりを大切にする教育がなされているのを目の当たりにし、真の「ゆとり学習」の意味を考えさせられた。

こうした授業の成果は、オーストラリア滞在中にしばしば感じた子どもたちの大らかな明るさや、学校訪問中に「何か質問ありますか？」とすすんで尋ねてくれる積極性にもよく表われている。子どもたちのノートにも個性が溢れている。どの子も工夫してカラフルな表紙をつくり、「自分は自分のカラーで」と主張することで、他の子の個性を尊重する姿勢が身についていくのだろう。

○これだっ！道徳の授業を変えてみた

帰国後、それまでの道徳の授業の仕方をすっかり改めた。生徒に何がやりたいかを訊き、授業の中身はすべて生徒に任せることにした。事前に準備はしない。生徒が用意した活動の中で、生徒の行動を通して課題（題材）を取り上げ、どんな答えが考えられるかを生徒と一緒に考えていく。授業の内容を決めようと学級会が開かれたが、早速暗礁にのりあがた。誰もが言いたい放題発言するだけで、話し合いが成り立たない。が、その時はじめて、互いに相手の気持ちをわかるうとしなければならないと、生徒自身で悟ったようだ。オーストラリアで見たようなロールプレイを即座に取り入れることは無理だが、黒板や紙面で、「様々な人がいて様々な考え方がある」と、気づかせられることはたくさんある。

中学校学習指導要領の道徳の目標の1つに、「進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養う」とある。この目標を実現するために、環境、開発、平和教育などの国際理解教育が日本より進んだオーストラリアの学校教育を見たい、道徳のカリキュラム作りのヒントを得たい…という当初の旅行目的は十分達成された。相手の立場で物事を考えられる心が、環境、開発、平和などの問題を解決していく上では必ず必要であることを教えられた。

星 伯佳さん（中学教員）'91参加



発見！生きた語学教育

昨夏のオーストラリアツアーでたくわえた熱と興奮は今だ健在…と、オーストラリアからの手紙を得意そうに見せにきてくれる子どもの顔を見るたびに確認する。ブリスベンの中学校で日本語の授業を参観したとき、私の生徒が書いた一通の手紙を紹介した。たちまち、文通を希望する子どもたちの長いリストができあがった。

早速、2学期の始まりに担当のクラスでリストを見せたところ、半分くらいの生徒が手紙を出したらしい。その後、待てど暮らせど返事がこない。もう諦めた…という頃になってやっと最初の返事が戻ってきた。(これも国民性と言っていいのかな?)「出発早々ドキドキさせられる」海の向こうとの文通だが、まだちゃんと続いている。一番やりとりの多い子が「四通目の手紙をもらった」と報告してくれた。時には片言の日本語が躍っていることもあって笑わせられる。

「お互いが知り合うために、お互いの言葉を学び合う時代が来ている。地球人として生きていくのに必要なことはお互いがよく知り合おうとすることなのだ」と確信した。そのきっかけとなった、中等学校での日本語の授業を見ることができたことが、今回の旅行の何よりの収穫。さて、そのご報告…

○外国語教育としての日本語

オーストラリアは、「移民の受け入れ国」「アジアの一国」「貿易相手国」という認識から、中国語・韓国語・インドネシア語・日本語・ベトナム語など近隣諸国の言語を学校教育に取り入れてきた。

○日本語を学んでいる!!

イプスウィッチは、シドニーやメルボルンとは違って、日本人の姿をあまり見かけない。こんなまちで、ごく普通の中学生が日本語を学んでいる。日常生活から離れた外国語という点では、日本の英語教育と状況が似ている。が、街のあちこちで「コンニチワ」と声をかけられたり、片言の日本語で話しかけてくれたりする子どもたちに、「この国の日本語教育には、日本の英語教育にない何か

があるのではないか」と大いに興味をそそられた。

このまちの私立セント・メリディ女学院を訪れた。外国语が1、2年生の選択科目で、フランス語、ドイツ語と並んで日本語もある。1クラスが約20人。担当の先生は、他の教科が専門で、週に2~3時間の日本語の授業をかけもちしている。日本を訪れたり、大学で日本語や文化について勉強した経験のある親日派の先生だ。

教室を訪ねると、壁に貼ったお習字が即座に目に飛び込んでくる。授業は、基本文型のストラクチャー・ドリルで練習したり、数の学習にピングームを応用したり…。書くことより話すことに重点をおいているそうで、参観者の私たちをインタビュー攻めにしてくれた。漢字、ひらがな、片仮名を書いた単語カードは見慣れた光景…但し、受験のための語学勉強とはまったく無縁。担当の先生の日本への関心が反映して、生徒たちは、言語の背景にある日本文化に興味がつきないようだ。身近な先生の興味のもちかた一つで、子どもたちの外国や外国語に対する意識は十分変えられる、という思いを新たにした。

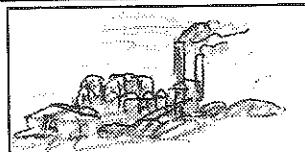
○外国人の子どもたちを助ける英語教育

シドニーの公立チャッソウッド中等学校では、外国人生徒の英語力習得を助けるインテンシブ・スクールが併設されている。日本人駐在員を含め、転勤、亡命、移民などでやってきた外国人の中學・高校レベルの子どもたちが、ある程度の語学力を身につけるまでここで過ごす。英語そのものを学ぶ以外に、英語を使って様々な教科を学ぶ時間もあり、どんどん英語の授業に慣れていく。

一方、小学生の場合は、前回の視察で訪ねたメルボルンの例が思い起こされる。ここでは移民が多く、私たちが訪ねた小学校でもクラスにベトナム人の女の子が3人いた。少女たちの傍らでは、ベトナム語のわかるヘルパーが授業を説明していた。子どもたちの中から同じ国の出身の子どもが頼まれて「後輩」を助けることもある。

英語教育と並行して母国語教育も行われている。英語が十分使い切れるようになる前に、母国語も忘れてしまい、自分の言いたいことを言える言語を全く失ってしまうことがないようにという配慮からだとと聴き感心した。

閔 忠子さん（中学教員）'90と'91参加



一人ひとりの存在が見える教育

メルボルンの公立ヤラビル小学校を訪ねた。この学校には、教師、児童、親が、「この学校は自分にとってどんな存在か？」を起点に、学校の目標や役割を話し合い、みんなが納得して決めた5つの校則がある〔①協力し底い合う中で各自が力に応じて学習できる環境をつくる ②生きていくために必要な力を習得する ③多文化社会で公正な態度を身につける ④責任をもつ ⑤次のステップを目指す〕。こんな学校でやられている教育って…？

○教育の原点

メルボルンは、昨今の移民・難民受け入れ政策により多大な影響を受けてきた。ヤラビル小学校では、英語を母国語としない親をもつ子どもが、現在全校児童の7割を占めている。英語で書かれた教科書が使えない。こうした子どもがやって来たその日からみんなに溶け込んで学習できるには、どうすればよいか？一試行錯誤の末は、決して特殊なことではなく、教育の原点であった。すなわち、教師がゆとりと柔軟性をもって子どもたちと接することのできる環境づくり。そうした環境があつてこそ、子どもたちと教師の間に信頼が生まれ、すすんで自己主張したり自己表現できる自発性や自信が、子どもの中に育まれていく。

○教室ではみんなが主役

最初に案内されたのは、教室間の壁をとっぱらった広い空間。その四隅ではそれぞれ別の授業が展開されていた。1人の教師に15人の子ども。教師はささやくように話しかけ、生徒は無言で、しかし活発に手を挙げ、ゆっくり自信をもって発言する。教師の目が生徒全体に届く。教師にゆとりがあるので、生徒も安心して発言できる。「必ず自分の意見を聞いてもらえる」と生徒が信頼しているのを実感する（日本では「50分間で生徒40人」、教師は正解のみを要求し、手を挙げてもあたらないから生徒は考えようともしなくなる…）。しかも、この15人は1年生と2年生の混合。すでに1度学習したことのある2年生が、今度は1年生に教える。それによって教育効

果が上がるという。言葉の通じない生徒にも最適。授業は1時間30分だが、動きが適度に取り入れられている。話をする時は教師の回りに集まり、作業では席に戻る。部屋の中央にはキッチンやおえかきコーナーがある。天井までの空間には針金が張りめぐらされ、洗濯ばさみでとめた子どもたちの絵がぎやかに自己主張している。

○ゆとりはどこから？

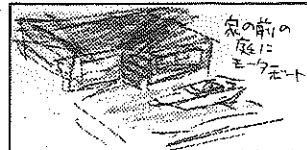
こうしたゆとりが他にもみられる。休日や夜間、学校施設の一部が一般市民に有料で開放される。その収益は、屋外用大型遊具の購入など学校経営に活用されて、財政面での独立を助ける。こんな柔軟な発想が日本の教育界にあればクラブ活動のコーチを雇うこともでき、現場の教師の負担が少しでも軽くなりゆとりが生まれるのに…。

子どもたちの目の高さで理解させよう、文化の違いを包みこんで一人ひとりの子どもを大切にしながら、なつかつどの子どもにもこの国で生きていくことのできる術を身につけさせようという教育のあり方にしみじみ共感した。

臼井香里さん（中学教員）'90参加



「アフリカ村」で



アフリカ村

遠いアフリカの国々が身近に体験できる。泥や藁にまみれてアフリカ式の家をつくる、アフリカ音楽のリズムにのって踊る、歌う、楽器を鳴らす、料理を作る、食べる、民話を聞く…。顔の見えなかった「アフリカ」から、そこに住む人々や暮らし、生活環境などが見えてくる。「もっと知りたい」と好奇心が刺激される。それが「アフリカ村」だ。

○緑の体験学習センター

メルボルンの中心部から車でわずか15分、子どもたちが体験を通してエネルギーと環境問題について学習できる施設がある。3ヘクタールの敷地に、省エネのモデルハウスや風力・水力発電所などエネルギーをテーマとしたアイディアいっぱいの設備、羊・山羊・にわとりなど家畜の遊ぶ広場、市民菜園、アボリジナルの伝統治療などに利用される薬草の植物園などがあり、様々なプログラムが展開されている。この一角に「アフリカ村」がある。

○顔の見えるアフリカって？

「アフリカ村」は、民間の海外援助団体、コミュニティ・エイド・アブロード (CAA) がすすめる国内の教育プログラムの一環である。40年近く海外援助活動の実績から、海外での援助支援と並行して国内における市民の啓蒙・教育活動を行なっていくことの重要性、また、貧困の現状を知らせるだけでなく、貧困の原因やその国と自分たちとの関係も伝えていく必要を認識するようになった。そこで、援助の対象として特につながりの深いアフリカをもっとよく知ってもらうおうと、「アフリカ村」プログラムがスタートした。

概して、アフリカは、マイナスな固定観念や涙を誘うような悲惨なイメージをもって捉えられがちで正確に理解されていない。こうした歪んだ認識は、幼い子どもの頃に始まって、一度固まってしまうと容易に変わらない。— もっとプラスのイメージや明るい面に光を当て、その中に自分たちの学ぶべきことがたくさんあることに気づいていこう。「アフリカ」を塊としてではなく、その中には様々な国や文化があり、いろいろどりの暮らしが生まれていることを体験してみよう。— というわけで「アフリカ村」がつくられた。資金集めから始まって、ハードもソフトもすべて手作り。

○からだと心で出会うアフリカ！

アフリカ人の教師2人にガイドとボランティアが常駐して、平日は学校の遠足や課外授業、週末は家族連れなど一般市民の利用に応えている。小学校高学年と中学生を主な対象とした多様なプログラム…住居ができるだけ本物に近いかたちで再現し、その中で息づく生活様式や文化、また、環境に適応した生活の工夫や資源の有効利用の試みなどを発見していく。環境問題についても自ずと関心が深まる。また、アフリカ音楽、ダンス、ビーズ細工、独特なヘアスタイルの編み方、料理、製陶など、五感をフル回転させた活動から、多角的に「アフリカ」と出会っていく。土を運び、重い水を運び、粘土をこねて壁土を造る。藁を積み屋根を造る。こうした作業を通して、子どもたちは、アフリカの人々の生活の知恵を感じとり、アフリカの人々も自分たちと同じように生活しているのだと実感する。巨大な写真パネルの展示からも、アフリカの様子が新鮮に伝わってくる。

○体験学習をより効果的にする教師用ハンドブック

ここでもう一つ注目したいのは、教師用のアフリカ学習の手引書、題して『アフリカへ、多様性の大陸』。CAAのボランティアと教師の協力で作成され、印刷会社の好意で無料で印刷出版されたという。イラスト、図表、地図等をふんだんに使い、ゲームや話し合い、ロールプレイなどを取り入れた活動展開になっている。アフリカ大陸の8つの国を取り上げて、それぞれの言語、歴史、生活様式、民族、住居などを学習していく中で、アフリカの多様性について理解を深めていく。「村」を利用する教師が、事前に子どもたちの興味を喚起したり、事後に子どもたちのアフリカに関する理解や関心をさらに深めたりできるよう構成されている。子どもたちの「村」での体験を、ただ1日の出来事に終わらせず継続的に活用していくことで、学習の機会に厚みを持たせることができる。

六角陽子さん（幼稚園教員）'90参加



再確認 「ありのままの姿を」

あっ、これでいいんだって思ったの。教室の中で机の並び方が多少ずれていても、姿勢が少しぐらい悪くたって、子どもたちが生き生きと話し合いに参加して、自分の考えはきちんと言えているし、人の話もちゃんと聞けている、そんな授業を見ているうちに…。国際理解教育に特に関心があったわけではなく、ただただオーストラリアへ行ってみたくて参加した。自由やゆとりのある学校生活で、本当に大切なことが優先されていることをしみじみ感じた。

○のびのびと

芝生の上に点在する校舎から三三五五現われる子どもたち。午前10時はおやつの時間。売店でボランティアの親たちがスナックを売っている。教室では、机の端に腰かけた教師が、リラックスした雰囲気で子どもたちに語りかけている。別のクラスは、社会科の授業に一日かけて近くを流れる川の水質調査。指導は水質庁の専門家がやってくれる。教科のカリキュラムはあるけれどあくまでも目安にすぎないのか、「何が何でも全部カバーしなければ」という切迫感はない。「必要になってからやっても遅くない」という余裕を感じた。

○子どもたちの地域社会への参加

一方で、子どもの主体性や発想がとても大切にされている。学校周辺にある荒れ地の縁と自然の復元を願う子どもたちの手紙が、市議会によって取り上げられ、森の回復が子どもたちに委ねられ、自治への参加の機会をつくった。学級会では、学校のきまりの伝達や評価ばかりでなく、「ダンスパーティーのために資金集めをしよう」「自分たちの手で環境をよくするために」など、創造的な話し合いが活発にされている。

○どうして?

現地に滞在中、それまで少しも疑問に思わなかった諸々のことが、頭の中を旋回し始めた。「何のため?」…毎日、教室に入ると自動的にはね返ってくる「規律! 礼!」。給食はみんな一緒に、「嫌いな物もがんばって食

べよう」と励まして、「みんなが食べ終わった後にウチの子、一人残してもいいから全部食べるよう指導してください」という親の要望に応える。教師は授業の合間に職員室に戻ってお茶を飲む。たまにはお菓子をつまむことだってないわけじゃない。子どもだってお腹が空くんだろうな。カリキュラムには忠実に。今年の必修漢字は△字、できなきゃ罪悪感も。子どもの前で「先生もわからない」なんていうのは絶対禁物。

おかげで日本の子どもたちは知識が豊富。答えがわかっていないれば発表もする。でも、自分の言いたいことが言えない。意見を言うのが苦手。他人の話が聞けない。親子で向き合って話すことが少ないせい? 子どもが忙しすぎる。

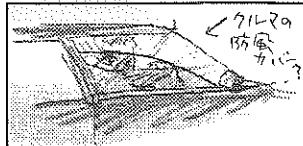
○本当に大切なことを伝えるためには

まず教師が肩の力を抜いて楽にならなくてはと思う。旅行後、見る目や考え方多少変わった。形に囚われなくなったり。子どもから思つたとおりの答えが出なくとも、「子どもの意見を尊重した方がいいのかもしれない」「それでもいいんだ」と思えるようになった。

意見を言うのが苦手な子どもたちにいきなり話し合いを押しつけても無理。まずは大人や環境が変っていかなければ。オーストラリアの良いところを即、真似て日本の学校に取り入れることは難しいけれど、とりあえず自分の持ち時間で、機会のある限り子どもたちにもっと自由にやらせてみたい。こんな気持ちの変化が今回の旅行の収穫かな。

石川ひろ子さん（小学校教員）'91参加





わが人生の一大事

昨夏のオーストラリア旅行から8ヵ月、「一番心に残っていることは?」という質問に、迷わず「ホームステイ」という答がかえってきた。人生観が変わったそうだ。

○森の中へ

ブリスベンではホストファミリー宅に到着早々、近くの森へブッシュウォーキングに誘われた。「お客さんにはまずお茶一杯」の習慣はないらしい。自然が生活の一部に入り込んでいる。客に対しても気がねなく、自然体で自分たちの生活に迎え入れてくれるのが嬉しい。森の中では徹底した「火の用心」ぶり。雨の少ないこの地方で山火事は深刻な問題だ。また、どこからとなく現われた「暴走族」を奥さんが追いかけ回してついに追っ払ったのに感心! 自然環境を守ろうとする姿勢が、一人ひとりの生き方に根付いていることを実感する。

○自然体で生きる

この国の人たちは、気負いなく自然体で生きている。私たちをもてなしてくれたホストファミリーにはベジタリアンが幾組かあったが、菜食主義だからといって片肱張るわけでもなく、周囲に自然に溶け込んでいる。一人ひとりの違いが無理なく受け入れられ、違うものどうし集まっていっしょに何かすることが日常茶飯事。こんな社会だからグローバル教育だって気負いなくなるのかもしれない。我が身を振り返ると、常に周りの様子を見ながら生きている、似た者同士で固まりがちで異質な人と出会う機会はほとんどない。したがって、ある信条のもとに生きようすると必死にならざるを得ないし、まわりからは「アイツは〇〇だ」と括弧付きで呼ばれてしまう。そんな生き方や人間関係のあり方が、両国の教育にも影響を及ぼしているに違いない。「自然体で」これが鍵かもしれない。

梅村松秀さん（高校教員）'91参加

ティーチャーズ・サポート・センター

この国では、みんなが子どもたちの教育に関わりたがっているようだ。おとなたちが次の世代に大きな期待や希望を抱いていて、その実現のためには、他人の手（それがたとえ「プロ」だとされていても）だけに「仕事」を委ねず、直接働きかけにはいられない。こうした働きかけに学校も教育省も、「教育」という重い荷物を自分たちだけで背負い込まず、肩を貸してくれる人には進んで協力していただこうという姿勢だ——と何か大変なことを発見したかのように、妙に納得してしまった。

こうした背景のもと、「オーストラリアにあって日本にないもの」の一つがティーチャーズ・サポート・センターという考え方である。ここでは官と民のそれぞれの事例からその役割や影響について紹介する。

○官 ピース・エデュケーション・リソース・センター (PERC、平和教育資料センター)

メルボルンにあるこのセンターは、ビクトリア州の教育省によって設立された施設だがお役所風の堅苦しさは感じられない。スタッフである2人の女性は元教師で、2年後には「再び学校に戻る」そうだ。2人とも「センターでの仕事は自分たちにとってよい勉強」だと言う。

州内の教師に対して、情報の提供、クラス運営に対するアドバイス、通訳、翻訳サービス、多文化地域における教育や障害児教育などへのサポートなどをを行う「インナーシティー・スクール・サポート・センター」という施設がある。PERCは、この中で3つに分かれるセクションの1つである。80年代半ば、国際平和年にあたって「平和と非暴力的解決」を学校教育の柱の1つに含めると提唱した教育省が、実践を普及、推進するための環境づくりとして設立した。以来、文字通り「サポート（支援）の中心的存在」として、様々な活動を行ってきている。対象は教師に限らない。個人も団体（学校・政府機関・民間団体など）も含めて、幅広い分野と層に参加や利用を呼びかけている。資料・情報・助言の提供以外に、研修会・講演会・シンポジウムの開催、特定地域における学校のカリキュラム開発と実践、政府組織と民間団体



への働きかけ、ネットワーキング、ニュースレターの発行、各種イベント開催、教材開発など。

官の組織でありながら、利用者に対して「押しつけ」や「指導」ではなく、あくまでも「サポート」であり続ける。教育省の担当者が現場の教師と対等の立場で協力する。教育省からの情報や、教育省の出している方針を授業の中に取り入れるための教案、アイディア等を提供する。これは、教育省が自ら決定した方針に真剣に取り組み、その実現（実践）を最優先として方策を検討、事業にあたっているという姿勢の表われでないだろうか。すなわち、教育省の方針を現場の先生たちにうまく効果的に伝えていくためのサポート（教育庁と教師双方にとっての）センターなわけだ。

（ERIC の研修プログラムの受入れ先がPERC。官民問わず多様な教育活動を折り込んだスケジュールを用意して、この国の教育の懐の深さを見せてくれた。）

○民 アイディアズ・センター

シドニーにはアイディアズ・センターという民間のサポートセンターがある（ERIC はここからアイディアを得て出発）。シドニーの海外協力団体が協力して設立した施設で、開発教育を中心に情報を提供している。ここでは、第三世界に関する資料の閲覧、複写、コンピューターのデータベース利用情報の提供、関係書籍の販売、関係団体の紹介、レッスンバンク（教案、教材の情報交換の場として、実践した教案などの情報をストックして

いくシステム）、キャラバンを組んでの学校巡回、関連諸団体との共催による学習会等、多彩な活動を行っている。資料室は、「地域別」「テーマ別」「教師用」など、情報が用途に応じて利用しやすいよう分類され、高校生がレポートの作成のため立ち寄るなど気軽に利用できる。

ブリスベンでは、クィーンズランド・開発教育センター（QDEC）が同様の活動を行っている。学校や社会人を対象とした講演会や研修会への講師派遣、ゲームやパズルなど楽しみながら関心を深め問題解決への姿勢を培う教材の開発、教師のトレーニングプログラムの実施など、教師や大学教授、専門家を含むボランティア活動が支えている。

このように民間団体が学校教育や教師に関わっていくことで、知識偏重や自国中心になりがちな学習に多様な価値観や多角的視点が導入され、「知識」と「情緒」という二つの軸からなる平面的学习に「行動」という第三の軸を加えた立体的な学习の環境ができる。外の世界と密接なつながりをもつ民間団体だからこそ、知識だけでなく参加型学習の必要性を認識し、自ら開発した教材や手法を教育現場に提供できるようだ。民間団体の活動が教育関係者のみならず広く市民に浸透していることも、学校教育に「地球市民」という発想が根付き、実践に発展していくやすい基盤づくりの要因となっているのだろう。

佐々木裕子さん（民間団体職員）'90参加
梅村松秀さん、望月浩明さん（高校教員）'91参加

情報コーナー

○今、ERICでは…

♪「環境教育」セミナーの準備すすむ

6月27~28日に、環境教育セミナーの開催を予定しています。講師には、海外の専門家も招聘。オーストラリア環境教育学会会長（グリフィス大学助教授）のジョン・フィエンス氏とERICの翻訳教材第2弾『プロジェクト・ラーニング・トゥリー』を作成した米国の環境教育団体（PLT）のキャシー・マックグローフリン氏（予定）が来日します。できるだけ多くの教育関係者の方々に、環境教育の実践を推進するためには参加いただけるようなプログラムを目指す

試験中です。また、セミナー開催に合わせて、上記の教材以外に地球環境地図帳などの出版も予定しています。
お問い合わせ・申込みはERICへ。

♪オーストラリア研修ツアー

日程は今夏8月22~30日、訪問先是シドニーとブリスベンを予定。定員12人。
ご希望の方はお早めにご連絡下さい。

お問い合わせ・申込みはERICへ。

♪「共有」「普及」をめざすプログラム

ERICは、プログラム参加者の体験や学習がより多くの人々に共有され、実践に生かされるような企画を、と試行錯誤しています。本号では、過去3回の海外研修プログラムを「まだ行っていない皆さん」にも役立てていただけるように企画しました。

ERIC

International ERIC NEWSLETTER No.11 APRIL 1992

国際理解教育・資料情報センター

〒114 東京都北区田端1-21-18 津田ビル1F 電話—03-5685-1177

このNewsletterの印刷・編集費用の一部は大竹財団からの後援です。

リサイクルを考え、印刷用紙に再生紙を使用しています。